

【実践報告】

# 園児の生活環境を生かした 自然物による造形活動の実践

——園庭の土を用いた土鈴づくり——

山本 将之\* ・宇野 晴恵\*\* ・海堀真衣子\*\*  
清水 晶子\*\* ・川口 昌子\*\*

キーワード：造形 表現 造形表現 子どもの表現 粘土 陶芸 土鈴

## 【凡例】

- ・引用文は「 」で示し、単行書・雑誌名は『 』で示した。
- ・引用文中にある「 」表記部分は、引用に際して『 』と改めた。
- ・本文中において、筆者が重要であると判断した言葉や、保育者や園児の言葉を「 」で示した。

## 1. はじめに

学校法人大谷学園を母体とする大谷幼稚園は、大谷学園創立 60 周年となる昭和 44 (1969) 年 10 月に設立された。そして、設立 50 年を迎える令和元 (2019) 年 4 月より、新たに大谷さやまこども園として出立した。大谷さやまこども園は富田林市から大阪狭山市に移転し、傾斜地を段状に利用した園庭を有している。特に、最上段の第 4 園庭には粘土質の土が含まれており、この土の保育への活用について、造形を専門とする第一筆者を含め、園内で検討を重ねていた。

第一筆者は、絵画などの平面表現と一線を画する立体表現を専門としており、とりわけ土粘土を主素材とする塑造家として、国内最大規模の日本美術展覧会を中心に、これまで多くの研究作品を発表してきた経緯を有する。加えて、当大学が陶芸窯を保有していたことから、「園庭の土を用いた造形活動」並びに「造形作品の焼成」という造形的な実践を思案した。

幼保連携型認定こども園教育・保育要領 (平成 29 年 3 月 31 日告示) では、「感性と表現に関する領域『表現』」について「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、

---

\*大阪大谷大学教育学部

\*\*大谷さやまこども園 (大阪狭山市)

豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。』<sup>1)</sup>としており、このねらいについては、「(1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。(2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。(3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。』<sup>2)</sup>としている。この記述の意として、幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説（平成30年3月）では、「豊かな感性や自己を表現する意欲は、幼児期に自然や人々など身近な環境と関わる中で、自分の感情や体験を自分なりに表現する充実感を味わうことによって育てられる。（中略）また、自分の気持ちを一番適切に表現する方法を選ぶことができるように、様々な表現の素材や方法を経験させることも大切である。』<sup>3)</sup>としている。

園庭は幼児期の生活経験に深く根ざした環境と言える。そして普段触れている土が乾燥や焼成を経て変容していく過程は、自然の不思議さや感動を園児に誘起すると期待される。また、土粘土の焼成を見据えた造形活動は、これまでに無い園児の経験になると見込まれる。さらに、可塑性を有する粘土は、自身の想いを表現する上で際限のない自由な身体操作を楽しむことのできる、他に代え難い素材と言える。

以上の背景から園庭の土を用いた造形活動を実践し、本稿ではこの実践の詳細を振り返るとともに、当実践の成果と課題を報告する。

具体的な実践の過程は次の通りである。まず園庭の土の焼成実験を行う。次いで園庭の土を園児と共に採取する。続いて、土に含まれる不純物を除去し、この粘土を用いた造形的な保育実践を行う。さらに乾燥期間を経て作品を陶芸窯に詰めた後、焼成する。最後に園外での作品展示を経て、造形物を園児に返却する。

なお、本実践ではこども園と大学の連携をより密に深めるべく、大阪大谷大学が開講する「保育実践演習 A」<sup>4)</sup>と関連付け、当実践が学生の学びの場になるよう努めた。

## 2. 土の採取と焼成実験

本実践に際して、事前に園庭の土を採取し、焼成の実験を行った。焼成実験では、採取した土を乾燥させた後、玄能で細かく砕き、再度水での練り直しを行った【写真1】。その土を陶芸窯で焼成することで、粘土が割れることなく焼成できることを確認した【写真2】。しかし、採取した土の粘性が乏しく、自由な操作を伴う造形に不向きであることや、焼成後に大きなヒビが確認されたことから、陶芸粘土を混ぜ、再度の焼成実験を行った。

園庭の土と陶芸粘土のおおよその配合比と、焼成後の土の形容は次の通りである。①園庭の土：陶芸粘土=7:3【写真3】、②園庭の土：陶芸粘土=5:5【写真4】、③園庭の土：陶芸粘土=3:7【写真5】。実験の結果、①の粘土はやや粘性が弱く、焼成後も多少のヒビが入る結果となった。②と③の粘土については、粘性が適度であり、自由な操作が可能であったことに

併せて、焼成後のヒビもほとんど見られなかった。

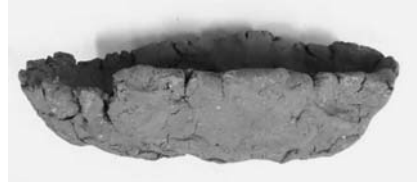
以上の実験の結果、園庭の土と陶芸粘土はおおよそ等分の配合によって、素材の自由な操作と焼成が可能にすることを把握した。



【写真1】  
粉碎した乾燥後の粘土



【写真2】  
焼成した園庭の土



【写真3】  
園庭の土：陶芸粘土=7:3



【写真4】  
園庭の土：陶芸粘土=5:5



【写真5】  
園庭の土：陶芸粘土=3:7

### 3. 園児による園庭の掘削

前章の実験をふまえ、大谷さやまこども園の4歳児クラス（もみじ組・まつ組）の計42名の園児を対象に、土を掘る活動を行った。土を掘るに先立ち、園児たちに「ここにある土をこねこねしていき、火で焼くとだんだんと固まり、すごく固くなるとこんな鈴ができるよ。」と土鈴の実物を見せた。園児が土鈴の形を具体的にイメージできるよう、実物を用いて視覚的な認知を促した。そして、「今日は鈴を作るための土掘りを行います。」と伝えると、「いえい！」「やったー！」と興味津々な姿が見られた。

土掘りでは園児が掘りやすいように、事前に学生が掘り起こしを行い【写真6】、その後園児たちに幼児用のシャベルを渡して土を採取するよう促した。土に積極的に触れる園児もいれば、土に触れることに抵抗感を抱く園児も見られたため、まず保育者が土を持ち、その土に触れてみる活動から開始した【写真7】。「ネチネチしている！汚れるー！」という子や、両手で土を持ち、泥だらけになって土を捏ねている子もいる【写真8】。「汚れるー！」と言っていた

子に「こねこねしてたら手がきれいになってきたよ。見て、とっても気持ちのいい土になってきた。」と伝えると、両手いっぱい土を取り、捏ね始める姿も見られた。また、どうしても土に触れることのできない園児には、シャベルで突付く等、道具で触るよう促し、抵抗感を和らげるよう努めた。

そして次第に、「きれいな団子ができた！」という心地良さそうな声があちこちから湧き上がり始めた。土を掴んだり、握ったりすると感触自体が気持ち良く、楽しいと感じるようになっていったようだ【写真9】。また、園児からは「ミミズがいる!」「ダンゴムシが出てきた!」という声も聞かれたほか、「ダンゴムシを元のベッドに戻してあげよう」と発言する園児もあり、自然物ならではの発見や、園児の思いやりの心を垣間見ることができた。

土に触っていると、湿り具合によってしっとりとして柔らかかったり、ぬるぬるして手から滴り落ちたりと、その感触は土の条件によって異なる。それを汚れて気持ち悪いと感じる瞬間もあったように思うが、次第に気持ち良いと感じ始めた園児も多かったのではないだろうか。このように土の肌感覚は多様であったが、この土掘り体験は、身近な自然物を園児自身が心と体で感じ取ることのできる感動体験になったと考える。園児は土を手指で直接触れることによって感触を味わい、楽しむ経験を通して触感覚や感性を豊かにしていく。日頃の遊び場である砂とは違った感触を、今回の土掘りを通して楽しむことができたのではないだろうか。



【写真6】  
事前に行った園庭の掘り起こし



【写真7】  
土に触れる活動①



【写真 8】  
土に触れる活動②



【写真 9】  
土に触れる活動③

#### 4. 土に含まれる不純物の除去と、粘土練り

土に含まれる不純物の除去については、当初第二章で記したように、乾燥した土を粉砕する方法を検討していた。しかしこの方法では石も砕くことになり、粉砕した石が粘土に混じってしまうことから、採取した土を水の入ったバケツに入れ、攪拌する方法へと変更した【写真 10】。

バケツに採取した土と水を入れ、手でかき混ぜ続けることにより、土の含有物が粒度に応じて分離する。具体的な含有物は、粘土、小石、根、葉である。水の中で攪拌した土を数時間から一日程度放置することで、土の含有物の中でも、密度の小さい葉や木の根は水面に浮かび上がり、密度の大きい小石や粘土などは水の底に沈殿する【写 11】【写真 12】【写真 13】。そして、上澄みを流すことで、小石と粘土の層が現れる。小石に比べて軽い粘土は上部に溜まり、重い小石が底に沈んでいるため、表層にある粘土を採取し、さらに小石と粘土の境界部分については、網を用いて濾していき、純粋な粘土のみを採取した【写真 14】。

採取した純粋な粘土には水が多分に含まれているため、数日間放置し、水分を蒸発させた【写真 15】。そして、第二章の焼成実験の結果を基に、土練機【写真 16】を用いて陶芸粘土と採取した粘土を練り合わせていき、自由な操作に耐えうる粘り気のある粘土を精製した【写真 17】。

なお、当初予定していた「土を粉砕する活動」と比較すると、本章の活動は相当の時間を必要としたため、園児が主体となる活動として取り組むには難しいと判断し、学生のみで活動を行った。



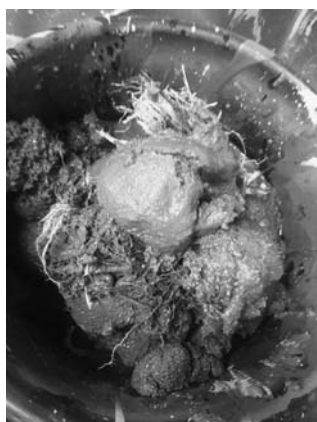
【写真10】  
水の中で搅拌した土



【写真11】  
搅拌により分離した根



【写真12】  
搅拌により分離した石



【写真13】  
搅拌により分離した小石や根



【写真14】  
土の濾過



【写真15】  
乾燥を進めるため、小分けにした粘土



【写真16】  
土練機



【写真 17】  
土練機で練った粘土

## 5. 土鈴づくり

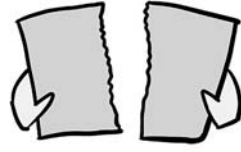
前述の大谷さやまこども園の4歳児クラス（もみじ組・まつ組）の計42名の園児と共に、園庭から採取した土を活用した土鈴づくりを行った。土鈴とは、土で制作した陶製の鈴のことである【写真 18】。大まかな制作方法は次の通りである。まず小さな丸い粘土を新聞紙に包み、この新聞紙を覆うように粘土を付ける【図 1】。次いで、乾燥後に粘土を焼成することによって、焼失した新聞紙が鈴の内部空間へと変わる。つまり鈴の内部には、新聞紙に包んだ小さな玉だけが残ることになる。そのため、鈴を振ると、この玉が壁に当たり、音が鳴る。以上の内容を大学生が園児に具体的に説明し、園児一人ひとりが作りたい土鈴の形を具体化していくことを願った【写真 19】。

土鈴づくりのために準備した材料と道具は次の通りである。粘土、ヘラ【写真 20】、粘土板【写真 21】、新聞紙、型抜き【写真 22】、弓糸【写真 23】、霧吹きである。

活動手順は次の通りである。①これまでの活動の振り返り、②粘土の配布、③土鈴づくり、④鑑賞、⑤片付け、である。



【写真 18】  
学生が制作した土鈴



【図 1】  
土鈴の断面図



【写真 19】  
学生による土鈴づくりの説明



【写真 20】  
へら



【写真 21】  
粘土板



【写真 22】  
型抜き



【写真 23】  
弓糸



### 5-1. これまでの活動の振り返り

活動の振り返りでは、土掘りの写真をスクリーンに映しながら、園児が視覚的にこれまでの活動を思い出せるよう配慮した【写真24】。また園児が経験していない「土に含まれる不純物の除去」についても、写真で示しながら、石や根が土に含まれていたこと、土練機を使って粘土を練ったことを紹介した。ここで重視した点は、「自分自身で採取した園庭の土を、この活動で使うこと」の意識付けである。保育者が用意した土が園児と無関係な土ではなく、普段から関わりの深い園庭の土であること、そしてこの土を使ってどんなことができるのか、という期待感を高めることを目的とした。



【写真24】  
スクリーンを使った振り返り

### 5-2. 粘土の配布

粘土の配布では、手のひら大に切り落とした粘土の塊を園児に配布した。事前の粘土練りの際に、硬すぎず柔らかすぎない粘土になるよう何度も水と硬めの粘土を足しながら、練り直しを行った。例えば柔らかすぎる粘土であれば、手で触れると粘土が手について離れなくなり、これが園児の不快感に繋がることもある。また粘土が硬すぎると手につくことはないが、手で自由に操作することが難しくなり、これが園児のストレスとなって造形に対する興味の薄れに繋がりがねない。当実践では柔らかい粘土と固い粘土の中間程度の、程よい柔らかさの粘土に練り上げるよう努めた。この結果、粘土を受け取った際に、土に対する抵抗感を示す園児はほとんど見られなかった。また、身近な環境である園庭の土が使われていることや、実際に土に触れた活動を振り返ったことが、粘土への抵抗感の緩和に繋がったのではないかと考える。

配布後には、園児が自由に粘土に触れることのできる時間を設定した。

土掘りの際には、土に触れることへの抵抗感を示す園児も複数見受けられたが、前述の通り、配布後の粘土に抵抗感を示す園児はほとんどおらず、多くの園児が抵抗無く粘土に触れることができていたように思う。指で押したり、へらで切ったりと、自由に形を変えることで

きる粘土の特性を楽しむ園児の姿が見られた。

### 5-3. 土鈴づくり

実際の土鈴づくりでは、活動を次のように分割した。①薄い粘土（お好み焼き）づくり、②新聞紙を丸める、③新聞紙をお好み焼き粘土で包む、④土鈴の形づくり、である。そして一組4、5人の人数に分かれ、1・2名程の学生が各グループに寄り添い、園児の作りたいものを聞きながら一緒に制作を進めた。

①薄い粘土（お好み焼き）づくりでは、配布した粘土を二分割し、そのうちの一つの塊を手で叩いて薄く伸ばし、お好み焼きのような薄い粘土の板をつくった【写真 25】。粘土の感触が前回の土採取の時とは異なり、「土が粘土になったなあー！」と会話も弾んでいた。また、前回よりも抵抗なく土粘土を触ることができるため、園児の取り組みにも勢いがあるように感じられた。園児の中には「何を作ろうか？どのように始めようか？」と戸惑う子もいたが、学生の援助もあり、まずは粘土の感触を楽しむ様子が見られた。

お好み焼き粘土は薄すぎると、新聞紙を覆う際に乾燥でヒビ割れる危険性があるため、保育者は「薄いお好み焼きと、厚いお好み焼きどっちが好き？」と園児に問いかけ、「厚いお好み焼き」と答えが返ってくると、「みんなが好きなの厚いお好み焼きを作ってね」と呼びかけ、粘土の板が薄くなりすぎないように注意した。

②新聞紙を丸める過程では、親指の第一関節程度の分量で粘土をちぎり、これを丸めて新聞紙で包んだ。子どもたちには「親指の先っぽくらい」と呼びかけ、粘土が大きくなりすぎないように注意を促した。仮に土鈴内部の玉が大きすぎると、高く響き渡るような音色になり難い。しかし玉が小さすぎると、後述する土鈴の穴から落ちてしまう危険性もあり、程よい大きさの玉作りが求められる。そのため、園児が玉を作った後、学生が玉の大きさを確認するよう努めた。

③お好み焼き粘土で新聞紙を包む活動とは、丸めた新聞紙をお好み焼き風の粘土で覆う過程である。このとき、粘土表面を指で撫でることで起伏の少ない表面に仕上げてしまうと、その後の形づくりの際に「整えた表面を壊したくない」という心理が働き、自由な造形活動に支障を来しかねない。そのため、新聞紙を粘土で覆う際には大胆に粘土をつけていくよう、保育者は見本を示した。なお、土鈴には必ず穴を空けなければならない【図 2】。理由は2点あり、1点目が焼成の際の爆発を防ぐためである。仮に土鈴に穴がなければ、温度の上昇に伴い土鈴内部の空気が膨張し、この結果土鈴が爆発してしまう危険性を有する。2点目はより大きい鈴の音色を奏するためである。仮に土鈴に穴がなければ、鈴の音色は内部に籠もってしまう。しかし穴があることによって鈴の音は内部で反響し、より大きな音色を奏することができる。以上2点の理由から、新聞紙をお好み焼き粘土で包む際には、必ず土鈴に穴を空けなければなら

い。なお、この穴の形に決まりはなく、生き物の口や目に見立てて穴を空ける園児の姿が見られた【写真26】【写真27】。

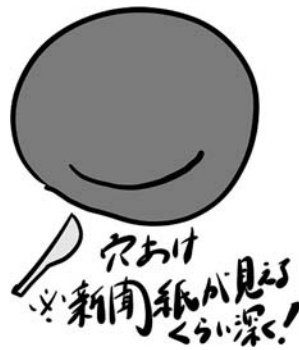
④土鈴の形づくりでは、園児が粘土の操作を楽しみながら、自由な造形を楽しむ過程であり、土鈴づくりの主要な活動である。具体的には、新聞紙を覆ったお好み焼き粘土に、二分割して残っていた粘土を自由につけていく活動である。具体物でも、抽象的な形でも良い。決してつくるものを強制せず、園児の造りたい形や、園児が楽しいと感じている手指操作を優先するよう保育者は努めた。しかし、「自由な造形」に不慣れな園児も多いため、保育者は園児に見立てのヒントを与えた。例えば、「お好み焼き粘土に小さな粘土を二つ付けたら何に見えるかな?」、あるいは「お好み焼き粘土に小さな粘土を一つ付けたら何に見えるかな?」等、見立てのヒントを保育者が実演と発問を通して示していくよう努めた。

当初、この自由な造形に戸惑いを示していた園児も、そばに寄り添う学生との会話をヒントに、少しずつ粘土の操作を楽しみ始める様子も見られた【写真28】【写真29】。やがて園児の中でつくりたいものが明確になり、「カブトムシ作る」「パトカーのタイヤはどこに付けよう」「ゾウの耳は大きいんやで」等、友達との会話を通して想像を膨らませている姿も見られた。なお、本体に手作りのパーツをつける際は保育者に援助を求めてくることもあった。また、型抜きで型を抜き、どんどん本体に接着していく園児の姿も見られ、それぞれの思いが具体化していく様子が伺えた。制作中に、「これ、どんな音が出るの?」、「何色になる?」と出来上がりを楽しみに制作に熱中する様子も見られた。ときに、保育者が準備した見本（例えばうさぎの土鈴等）の真似から始まったグループも見受けられたが、それぞれの手指操作を通して、最終的には見本に因われない自由な表現が見られた【写真30】【写真31】。



【写真25】

お好み焼きのような薄い粘土板づくりの様子



【図2】

土鈴に空ける穴



【写真 26】  
土鈴の穴を口に見立てた園児の作品



【写真 27】  
土鈴の穴を目や口に見立てた園児の作品



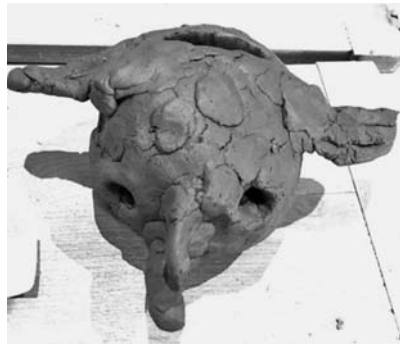
【写真 28】  
園児の制作の様子①



【写真 29】  
園児の制作の様子②



【写真 30】  
園児の作品①



【写真 31】  
園児の作品②

#### 5-4. 鑑賞活動

鑑賞活動では、制作した土鈴を友達に紹介したい園児を募り、園児一人ひとりが工夫した点や楽しかった点などを発表できる場を設けた【写真 32】。園児たちは、発表の際に言葉を探し

ながら、作った土鈴を誇らしげに発表していた。なお、発表を通して改めて自身の作品と向き合っているようにも感じられた。他にも、空を飛ぶ土鈴をつくった園児は、土鈴を手に持って宙に浮かべる仕草を見せており、鑑賞する園児の興味を惹きつけている姿も見られた。友達の前で自分の作品を見せ合うことによって、「自分も作ってみたいな」、「かっこいいな」「作り方を教えてもらおう」という気持ちを刺激し合い、発表する側も自信に繋がっていく。園児たちの成長が目目の当たりになる時間である。

また言葉に詰まる園児に対しては、魅力的な造形の痕跡を感取した保育者が園児の想いを代弁するよう努めた。四人一グループで土鈴づくりを行ったことから、他者の作品を見る機会の無かった園児たちは、友達の作品が紹介される毎に驚いた様子や共感する姿を見せており、他者理解に繋がる貴重な活動になったのではないかと考える。

鑑賞を経て、次回の活動が「粘土を窯に入れること」を園児に伝え、今後の期待感を高めるように努めた。そして活動後は、園児自身が粘土ベラを洗い、片付けを行った。片付けの最中には、友だちと一緒にヘラを洗いながら制作した土鈴を話題にする姿も見られ、園児にとって充実した造形活動になったのではないかと考える。

粘土の感触を十分に味わい、つくりたいものを思い思いに表現する土鈴づくりを通して、造形することや表現することを「またやってみたい」と思う園児の気持ちを高めることができたいと願う。



【写真 32】  
鑑賞の様子

## 6. 園児が制作した土鈴作品の造形的な特徴

本章では、園児が制作した土鈴作品を対象に、彫刻的視点から幼児の立体表現が有する造形的魅力を考察する。

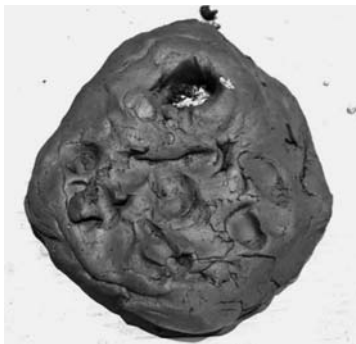
【写真 33】の作品は、園児の作品の中でも行為の痕跡が多く感取された作品である。球に比

べてやや平たくなっている形から、手のひら全体を使って粘土を叩いたり、押し潰していたことや、このような行為によって素材との会話を楽しんでいたことが想像される。また、表面についた細やかな凹凸にも注目したい。この凹凸はおそらくは粘土を指で押した痕跡であり、押し潰した形が維持される粘土の可塑性に興味をもったのではないかと想像する。具体的な形に因われず、何度も自身の行為を確認するように土に触れ、その痕跡を維持する素材の不思議さを堪能した作品ではないかと考える。

【写真 34】の作品は、動物の頭部だけでなく、体の部分にも粘土を大胆につけている。多くの園児は、例えば動物であれば顔だけをつくっていたが、本作では多くの園児が着手しなかった体の部分についても想像を膨らませていることを特徴としている。また【写真 35】は触覚のような、手脚のような突起を上下左右に、自由に構成した作品である。その形は虫のようにも見え、固い岩肌のようにも見える。形を構成する一つ一つの粘土が空間を支配し、存在感を高めているように感じられる。

人間の立体視は成長と共に衰退する傾向があるのではないかと第一筆者は感じている。例えば立体造形の経験の乏しい小学生や中学生、あるいは高校生や大学生は立体造形に取り組む際に球体の粘土にヘラで模様を描き、平面的な表現に終始することも珍しくない。換言すれば、空間に対して一定量の粘土を立体的に構成することや、量と量の関連による有機的な表現は年齢を経るにつれて少なくなるように感じられる。これは現代における漫画やキャラクター表現の台頭が要因として考えられるほか、自己表現は決して強制されるものではないため、上述の内容は平面的な表現を否定するものではないが、地面から重力に逆らって生える木の生命感を感取する感覚もまた大切にしたいようにも感じている。

幼児の立体表現には大胆な量の空間構成や有機的な繋がりが見られることが多く、【写真 34】や【写真 35】には、まさに原始的な生命感や躍動感が感じられる。



【写真 33】  
園児の作品③



【写真 34】  
園児の作品④



【写真 35】  
園児の作品⑤

## 7. 作品の窯詰め体験

前章で制作した園児の土鈴作品は乾燥期間を経て、陶芸窯にて焼成を行った。乾燥の目安は約二週間程度であるが、完全乾燥が焼成の条件になるため、少しでも湿り気を感じた場合には二週間以上の乾燥を要することもある。粘土は焼成することによって化学反応を起こし、物質自体が変容する。具体的には硬質化し、吸水した水分を素早く排出する物質へと変化する。このように、粘土の焼成は物質としての変化を伴うため、この焼成過程を体験的に知覚することが土そのものを理解する上で重要になる。仮に土鈴の粘土制作のみを経験した園児に焼成後の土鈴を返却すると、「なぜ土鈴が固くなっているのか」、「なぜ水を素早く吸水し、排出するのか」といった疑問に対して、感覚的な納得感を得ることが難しいと推察する。一方で、作品の窯詰めを体験することにより、「粘土を焼く」という意味を体験的に知覚できるのではないかと考える。また、陶芸窯には温度が数値で表示されているため、焼成中の数値の上昇を見ることで、より具体的に「粘土を焼く」という言葉の内実を感取できると考えた。

実際の窯詰めでは、初めて見る窯の大きさや雰囲気に関心する園児の表情が見られた。特に窯の中に入りこむように自身の作品を窯詰めすることで、窯の大きさをより体験的に感じることであったのではないかと考える【写真 36】。窯詰め後には、作品を 800 度程度で焼成することに併せて、割れてしまう危険性があることを伝え、全員で「割れませんように」とお祈りをした。



【写真 36】  
窯詰めの様子

## 8. 大学祭での展示と返却

焼成した土鈴は大阪大谷大学の大学祭（2019年11月9日－10日）にて展示を行い【写真37】、この受付に学生も参画した。保育実践演習Aの最後の振り返り【写真38】では、「保護者の方が園での活動を知る機会になっていたこと」、「園児たちが嬉しそうに、保護者に土鈴づくりのことを話していたこと」、「保護者の方が、土鈴ができるまでの過程に驚かれていたこと」等が報告され、展示を通して保護者が子ども園の活動に対する理解を深めていることや、展示が子どもと保護者を繋ぐ貴重な機会の一翼を担っていることが再確認された。

大学祭での展示を終えた数日後に園の遊戯室に2クラスが集まり、作品返却を行った。窯で焼成した土鈴は【写真39】のように、白味を帯びた色へと変化した。二名の学生が「割れないように、大事に持ってね」と土鈴の取り扱い方を説明しながら、作品の裏に刻まれた園児の名前を一人ずつ読み上げ、順番に土鈴を返却した。園児にとっては自身がつくった作品を手にとって実際に音を鳴らすことのできるワクワクする時間である。返却してもらった土鈴をすぐに振って、音を鳴らしてみる園児たち。「なったー!」「〇〇君、聞いて、先生聞いて!」と大興奮である。友達の作品を見て「可愛いなー、それクマやんなー!」等、あちこちから歓声上がる。自分の作品に驚き、満足感を感じている様子である。中には「あ!耳が取れてしまった、、、」と耳やパーツが取れてしまったことを悲しむ園児も見られた。嬉しくて、つい強く触ってしまったのかもしれない。

音の鳴らない土鈴については、鈴の穴と同程度の大きさの陶の破片を入れることにより対処した。作品返却では、焼成前後の色の変化や固さ、手触りの違いに触れ、園庭の土が徐々に変化してきた過程を振り返ることで、土の不思議さ面白さを園児が実感できるように努めた。土の変化はもちろん、窯入れ体験をするために園の外に出て大学に行ったこと等、土鈴づくりを



通して経験した全てが園児にとって珍しく、それぞれの内的な発見に繋がったと考える。

返却の最後には園児全員で「おもちゃのチャチャチャ」を演奏した【写真40】。全ての土鈴が同じ土からできているにも関わらず、一人ひとりの土鈴から奏でられる音色は少しずつ異なっている面白さがあった。それは作品の大きさや厚みが物語るように、土鈴が子どもたち一人ひとりの思いが詰まった自分だけの作品となったからである。土掘りの段階では粘土を触ることに抵抗を示した園児もいたが、次第に感触が気持ち良くなり、触る活動は創作へと導かれて個々の土鈴が形造られた。一人ひとりの思いが詰まったそれぞれの音色が響き渡り、土鈴づくりは全ての活動を終えた。



【写真 37】  
大学での展示の様子



【写真 38】  
保育実践演習 A の振り返り活動



【写真 39】  
焼成後の園児の土鈴



【写真 40】  
土鈴のよる演奏会

## 9. おわりに

本章では、本実践の成果と課題を記す。まず本実践の成果として、園と大学の連携が無ければ成立しないような特色ある保育を展開できた点が挙げられる。具体的には「土の焼成」という点であり、陶芸窯を有する大学ならではの造形的な実践が展開できたと考える。また、各活動の折に触れて「園庭で採取した土」を強調していたため、完成した土鈴の色が変化していても、その材料となった土が園庭で採取されたことを多くの園児が自覚しており、幾許ながらも身近な環境への興味を促すことができたと考えられる。さらに、返却の際に焼成温度が800度であることを覚えていた園児も多く、土を焼成することで材質が変化する不思議さを感じた園児も多かったのではないかと推察する。後述する土の不思議さや自然の偉大さを、園児が体験的に知覚する契機になっていれればと願う。

本実践の課題は、見本として示した土鈴のバリエーションが少なく、見本に引っ張られる子どもが多かった点が挙げられる。これは決して悪い側面だけではないが、より豊かなアイデアを園児から引き出すためには、具象・抽象を問わず多様な見本があっても良かったように感じた。また不純物を除去する活動に園児が介入できなかった点も課題として挙げられる。土という素材を深く知るために、土に大量の根や小石が含まれていることを、除去作業を通して体感できていれば、より素材理解が深まったのではないかと考える。以上が本実践の成果と課題であり、最後に本実践を通して第一筆者自身が感じた内容を記し、まとめとしたい。

土は乾燥や焼成を経て、色や形、性質が変化する他に類を見ない素材と言える。焼成前の土は、水を含むと形の維持が困難な程に柔らかくなり、乾燥すると石のように固くなる。色については乾燥前後によって、濃い茶色から白味の強い色へと変化する。また植物のような、あるいは生き物のような自然特有の匂いも有している。焼成後の粘土は化学反応によって強固になり、水を含んでも柔らかくならない性質へと変化する。また色も白に近い色や、鉄分の量によ

っては赤味を帯びることも多い。手触りは粘土に含まれる小石の量によって変化する。例えば小石の量が多ければ粗い土肌になり、少なければ滑らかな土肌になる。加えて、土には生物のすみかや水分を保持する役割の他、窒素や水・ミネラル等を植物の根に運ぶ役割、さらには死んだ生き物や落ち葉を分解する役割も担っている。そして土はどこまでも広がり、人間が立つために不可欠な大地を形成している。

土に限らず、自然物に触れること、感じること、あるいは操作することを通して、自然の大きさや偉大さを感じる契機になる。また第一筆者に限って言えば、重力下における自然物の形やバランス、色の深さに驚嘆とするばかりで、外を眺めるだけで心が豊かになる感覚に満たされる。

造形活動は自然の偉大さを知ることが目的ではなく、あくまで個人の興味に応じた主体的な操作や感覚を楽しむことが第一義であり、この行為の痕跡が結果として自己的な表現として現れる。そしてお互いの表現を鑑賞し、認め合うことで他者理解が生まれると共に、自己肯定感が育まれると筆者らは考える。

造形素材はあくまでも主体的な活動を援助する要素の一つであることを忘れてはならない。しかし素材との会話を続けることにより、自然を知り、自然の摂理に触れることもまた可能である。保育という領域の根は深く、突き詰めると人間が生きることや存在することの意味を問うことに繋がると考える。このように、保育が果てなき学術であるとするならば、今後も大学と園が連携し、教員の専門性を保育の実践に生かしていきたいと願う。

#### 注

- 1) 内閣府・文部科学省・厚生労働省、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』, 2017年版, p.61
- 2) 前掲書, p.61
- 3) 内閣府・文部科学省・厚生労働省、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』, pp.286-287
- 4) 大阪大谷大学が開講する幼児教育専攻4年次配当の授業(2単位)